勝又浩
KATSUMATA Hiroshi

山椒魚の忍耐

井伏鱒二の文学

水声社

人類古来の悲しみ

水声社

自然を愛し、地に足ついた生活実感のただなかで創作を続けた井伏鱒二。

岩屋のなかの山椒魚は、作者とともに人間の悲しみを背負い続けた——

生誕120年 没後25年

IBUSE Masuji

水声社

平穏な日々を綴るかに見えるその小説には、しかし「人類古来の悲しみ」が静かに織り込まれている。巧まざる文学によって生そのものを見つめた井伏鱒二の人と作品をめぐる逍遥。

戦争のために旗を振らなかった井伏鱒二は、平和のためにも旗は振らない人なのだ。しかし、それ故にこそ、それはこの人々の不幸、日本そのものの不幸、そしてそういう不幸を作り出してしまう、戦争を繰り返す人間そのものの悲しみにまで届いた小説なのだ。

……本書より

目次

山椒魚の忍耐　『山椒魚』と『賭』……9
ドリトル先生とテスト氏　井伏鱒二と小林秀雄……31
川と街の考現学　井伏鱒二と横光利一……57
屈託とやつれ　『引越やつれ』『夜ふけと梅の花』……83
幸と不幸の配分方程式　『歪なる図案』『朽助のゐる谷間』……105
理想郷としての主従　『さざなみ軍記』『かるさん屋敷』……123
常識交換　『花の町』『遥拝隊長』……159
立ち会う「私」　『へんろう宿』『山峡風物誌』……183
山川草木の説　『青ヶ島大概記』……203
もう一つの戦後文学　『病人の枕もと』……227
黒い雨と白い虹　『黒い雨』……239
あとがき……265